

令和5年度 岐阜薬科大学 学力検査問題 数学 解答

1 $x \geq 0, y \geq 0, (x+y-1)(x^2+y^2-2) \leq 0$

(1) $(x+y-1)(x^2+y^2-2) \leq 0 \Leftrightarrow \begin{cases} \text{「}x+y-1 \leq 0 \text{ かつ } x^2+y^2-2 \geq 0 \text{」} \dots\dots \textcircled{1} \\ \text{または} \\ \text{「}x+y-1 \geq 0 \text{ かつ } x^2+y^2-2 \leq 0 \text{」} \dots\dots \textcircled{2} \end{cases}$

であり、 $\textcircled{1} \Leftrightarrow$ 「 $y \leq -x+1$ かつ $x^2+y^2 \geq 2$ 」 の表す領域は図1、

$\textcircled{2} \Leftrightarrow$ 「 $y \geq -x+1$ かつ $x^2+y^2 \leq 2$ 」 の表す領域は図2

である。これらを合わせた領域のうち「 $x \geq 0$ かつ $y \geq 0$ 」を満たす部分が領域 D なので、求める領域 D は図3である。

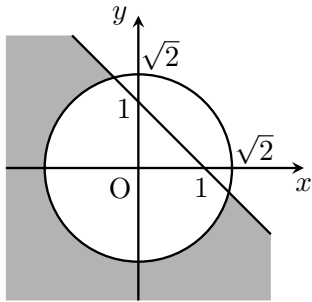


図1

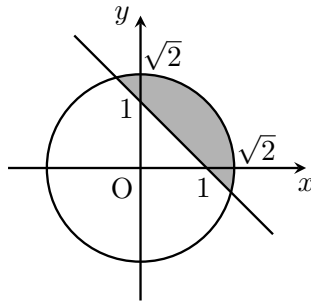


図2

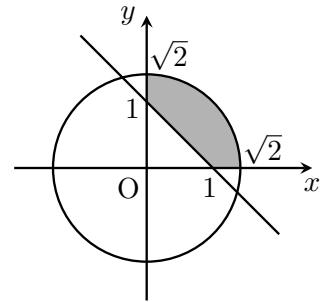


図3

(2) 直線 $2x+y=k$ ($\Leftrightarrow y=-2x+k$ $\dots\dots \textcircled{3}$) と領域 D が共有点をもつような実数 k の、最小値および最大値を求めればよい。 $\textcircled{3}$ において、 k は、傾き -2 の直線の y 切片である。直線 $\textcircled{3}$ と領域 D が共有点をもつように、 k の値を変化させる。このとき、

- 図4のように $\textcircled{3}$ が点 $(0,1)$ を通るとき、 k は最小値 1 をとる。
- 図5のように $\textcircled{3}$ が円 $x^2+y^2=2$ と第1象限で接するとき、 k は最大値をとる。

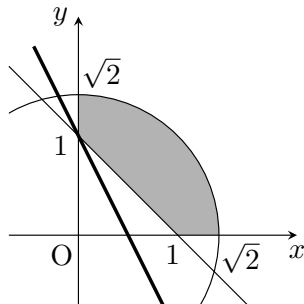


図4

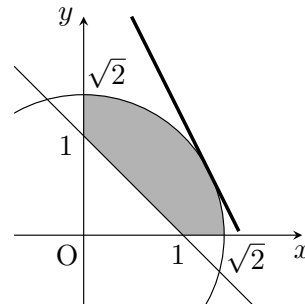


図5

以下、 k の最大値を求める。 $\textcircled{3}$ と $x^2+y^2=2$ が接するための条件は、原点と $\textcircled{3}$ ($\Leftrightarrow 2x+y-k=0$) との距離が $\sqrt{2}$ となることである。よって、

$$\frac{|2 \cdot 0 + 0 - k|}{\sqrt{2^2 + 1^2}} = \sqrt{2} \Leftrightarrow |k| = \sqrt{10} \Leftrightarrow k = \pm\sqrt{10}$$

このうち接点が第1象限であるものは $k = \sqrt{10}$ である。このとき、

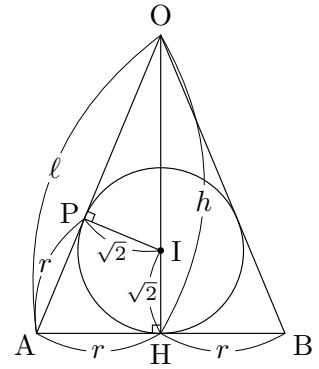
$\textcircled{3}$ と $x^2+y^2=2$ の接点は、 $\textcircled{3}$ ($\Leftrightarrow y = -2x + \sqrt{10}$) と $y = \frac{1}{2}x$ の交点に一致する。

$\frac{1}{2}x = -2x + \sqrt{10} \Leftrightarrow x = \frac{2\sqrt{10}}{5}$ より、この交点は $\left(\frac{2\sqrt{10}}{5}, \frac{\sqrt{10}}{5}\right)$ である。

以上より、 $2x+y$ は、 $(x, y) = (0, 1)$ で最小値 1 をとり、 $(x, y) = \left(\frac{2\sqrt{10}}{5}, \frac{\sqrt{10}}{5}\right)$ で最大値 $\sqrt{10}$ をとる。

2

- (1) 直円錐 C の頂点を O 、底面の円の中心を H とし、
 底面の直径の 1 つを AB とする。
 また、球 S の中心を I とする。このとき、この図形の、
 平面 OAB による断面は右図のようになる。右図において、
 球 S の断面は、 I を中心とする半径 $\sqrt{2}$ の円である。
 また、 I は線分 OH 上にある。
 球 S と直円錐 C の接点のうち母線 OA 上にあるものを
 P とする。このとき、 $OH \perp AB$, $IP \perp OA$,
 $IH = IP = \sqrt{2}$, $AH = BH = AP = r$ である。
 ここで、 r の取り得る値の範囲は $r > \sqrt{2}$ である。



直円錐 C の高さを $OH = h$ 、母線の長さを $OA = OB = l$ とおく。
 $\triangle OHA \sim \triangle OPI$ より $HA : AO : OH = PI : IO : OP$ なので、
 $r : l : h = \sqrt{2} : (h - \sqrt{2}) : (\ell - r)$ である。よって、

$$r : l = \sqrt{2} : (h - \sqrt{2}) \text{ より } \sqrt{2}l = r(h - \sqrt{2}) \dots\dots ①$$

$$r : h = \sqrt{2} : (\ell - r) \text{ より } \sqrt{2}h = r(\ell - r) \dots\dots ②$$

①を ② $\times\sqrt{2}$ に代入して

$$2h = \sqrt{2}r(\ell - r) = r(\sqrt{2}l - \sqrt{2}r) = r(r(h - \sqrt{2}) - \sqrt{2}r) = r^2(h - 2\sqrt{2})$$

よって、 $2h = r^2(h - 2\sqrt{2}) \Leftrightarrow (r^2 - 2)h = 2\sqrt{2}r^2$

ここで、 $r > \sqrt{2}$ より $r^2 - 2 > 0$ なので、 $h = \frac{2\sqrt{2}r^2}{r^2 - 2}$

したがって、直円錐 C の体積 V は $V = \frac{1}{3}\pi r^2 h = \frac{2\sqrt{2}\pi r^4}{3(r^2 - 2)} \quad (r > \sqrt{2})$

(2)

$$\frac{dV}{dr} = \frac{2\sqrt{2}\pi}{3} \cdot \frac{d}{dr} \left(\frac{r^4}{r^2 - 2} \right) = \frac{2\sqrt{2}\pi}{3} \cdot \frac{4r^3(r^2 - 2) - r^4 \cdot 2r}{(r^2 - 2)^2} = \frac{2\sqrt{2}\pi}{3} \cdot \frac{2r^3(r^2 - 4)}{(r^2 - 2)^2}$$

なので、増減表は右のようになる。

よって、 V は $r = 2$ のとき最小値

$$V = \frac{2\sqrt{2}\pi \cdot 2^4}{3(2^2 - 2)} = \frac{16\sqrt{2}}{3}\pi \text{ をとる。}$$

r	$\sqrt{2}$		2	
$\frac{dV}{dr}$		-		+
V	$(+\infty)$	\searrow		\nearrow

$$(1) f(t) = e^t - \left(1 + t + \frac{1}{2}t^2\right) \text{ とおくと, } f'(t) = e^t - 1 - t, \quad f''(t) = e^t - 1$$

よって, $t > 0$ のとき $f''(t) = e^t - 1 > 0$ なので, $f'(t)$ は $t \geq 0$ で単調増加

よって, $t > 0$ のとき $f'(t) > f'(0) = 0$ なので, $f(t)$ は $t \geq 0$ で単調増加

よって, $t > 0$ のとき $f(t) > f(0) = 0$

$$\text{したがって, } t > 0 \text{ のとき } f(t) = e^t - \left(1 + t + \frac{1}{2}t^2\right) > 0 \Leftrightarrow 1 + t + \frac{1}{2}t^2 < e^t$$

次に $g(t) = \left(1 + t + \frac{1}{2}t^2 e^t\right) - e^t$ とおくと,

$$g'(t) = 1 + \left(\frac{1}{2}t^2 + t - 1\right)e^t, \quad g''(t) = \left(\frac{1}{2}t^2 + 2t\right)e^t$$

よって, $t > 0$ のとき $g''(t) > 0$ なので, $g'(t)$ は $t \geq 0$ で単調増加

よって, $t > 0$ のとき $g'(t) > g'(0) = 0$ なので, $g(t)$ は $t \geq 0$ で単調増加

よって, $t > 0$ のとき $g(t) > g(0) = 0$

$$\text{したがって, } t > 0 \text{ のとき } g(t) = \left(1 + t + \frac{1}{2}t^2 e^t\right) - e^t > 0 \Leftrightarrow e^t < 1 + t + \frac{1}{2}t^2 e^t$$

(2) (1) より, $t > 0$ において, $1 + t + \frac{1}{2}t^2 < e^t < 1 + t + \frac{1}{2}t^2 e^t$ が成立するので,

$$t + \frac{1}{2}t^2 < e^t - 1 < t + \frac{1}{2}t^2 e^t \Leftrightarrow \frac{1}{t} + \frac{1}{2} < \frac{e^t - 1}{t^2} < \frac{1}{t} + \frac{1}{2}e^t \dots\dots ①$$

も成立する。よって, $x > 0$ のとき, ($x \leq t \leq 2x$ を満たす全ての t に対して $t > 0$ なので,) ①より

$$\int_x^{2x} \left(\frac{1}{t} + \frac{1}{2}\right) dt < \int_x^{2x} \frac{e^t - 1}{t^2} dt < \int_x^{2x} \left(\frac{1}{t} + \frac{1}{2}e^t\right) dt \dots\dots ②$$

が成立する。ここで,

$$\int_x^{2x} \left(\frac{1}{t} + \frac{1}{2}\right) dt = \left[\log t + \frac{1}{2}t\right]_x^{2x} = \log 2 + \frac{1}{2}x$$

$$\int_x^{2x} \left(\frac{1}{t} + \frac{1}{2}e^t\right) dt = \left[\log t + \frac{1}{2}e^t\right]_x^{2x} = \log 2 + \frac{1}{2}(e^{2x} - e^x)$$

なので, $x > 0$ において

$$② \Leftrightarrow \log 2 + \frac{1}{2}x < \int_x^{2x} \frac{e^t - 1}{t^2} dt < \log 2 + \frac{1}{2}(e^{2x} - e^x) \dots\dots ③$$

$$\lim_{x \rightarrow +0} \left(\log 2 + \frac{1}{2}x\right) = \log 2, \quad \lim_{x \rightarrow +0} \left(\log 2 + \frac{1}{2}(e^{2x} - e^x)\right) = \log 2 + \frac{1}{2}(1 - 1) = \log 2$$

なので, はさみうちの原理より $\int_x^{2x} \frac{e^t - 1}{t^2} dt = \log 2$

(3) (2) より $c = \log 2$ である。③より, $x > 0$ において

$$\frac{1}{2} < \frac{1}{x} \left(\int_x^{2x} \frac{e^t - 1}{t^2} dt - \log 2\right) < \frac{1}{2} \cdot \frac{e^{2x} - e^x}{x} = \frac{e^x}{2} \cdot \frac{e^x - 1}{x} \dots\dots ④$$

ここで, $h(x) = e^x$ とおくと, $\lim_{x \rightarrow 0} \frac{e^x - 1}{x} = \lim_{x \rightarrow 0} \frac{h(x) - h(0)}{x} = h'(0)$ なので,

$$h'(x) = e^x, \quad h'(0) = 1 \text{ より } \lim_{x \rightarrow 0} \frac{e^x - 1}{x} = 1 \text{ である。したがって, 特に } \lim_{x \rightarrow +0} \frac{e^x - 1}{x} = 1$$

よって, $\lim_{x \rightarrow +0} \frac{e^x}{2} \cdot \frac{e^x - 1}{x} = \frac{1}{2} \cdot 1 = \frac{1}{2}$ なので, ④において, はさみうちの原理より

$$\lim_{x \rightarrow +0} \frac{1}{x} \left(\int_x^{2x} \frac{e^t - 1}{t^2} dt - \log 2\right) = \frac{1}{2}$$

4

(1) $X = 2$ となるのは、点 P が $A \rightarrow B \rightarrow D$ または $A \rightarrow C \rightarrow D$ と移動するときなので、

$$p_2 = \frac{2}{3} \cdot \frac{1}{3} + \frac{1}{3} \cdot \frac{2}{3} = \frac{4}{9}$$

$X = 3$ となるのは、点 P が $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow D$ と移動するときなので、

$$p_3 = \left(\frac{2}{3}\right)^3 = \frac{8}{27}$$

$X = 4$ となるのは、点 P が $A \rightarrow C \rightarrow A \begin{cases} \nearrow B \rightarrow D \\ \searrow C \rightarrow D \end{cases}$ と移動するときなので、

$$p_4 = \left(\frac{1}{3}\right)^2 \cdot p_2 = \frac{1}{9} \cdot \frac{4}{9} = \frac{4}{81}$$

$X = 5$ となるのは、点 P が $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow A \begin{cases} \nearrow B \rightarrow D \\ \searrow C \rightarrow D \end{cases}$ または $A \rightarrow C \rightarrow A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow D$ と移動するときなので、

$$p_5 = \frac{2}{3} \cdot \frac{2}{3} \cdot \frac{1}{3} \cdot p_2 + \left(\frac{1}{3}\right)^2 \cdot p_3 = \frac{4}{27} \cdot \frac{4}{9} + \frac{1}{9} \cdot \frac{8}{27} = \frac{8}{81}$$

$X = 6$ となるのは、点 P が $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow D$ または $A \rightarrow C \rightarrow A \rightarrow C \rightarrow A \begin{cases} \nearrow B \rightarrow D \\ \searrow C \rightarrow D \end{cases}$ と移動するときなので、

$$p_6 = \frac{2}{3} \cdot \frac{2}{3} \cdot \frac{1}{3} \cdot p_3 + \left(\frac{1}{3}\right)^2 \cdot \left(\frac{1}{3}\right)^2 \cdot p_2 = \frac{4}{27} \cdot \frac{8}{27} + \frac{1}{9} \cdot \frac{1}{9} \cdot \frac{4}{9} = \frac{4}{81}$$

(2) 点 P が $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow A$ と移動することを A_{III}
 $A \rightarrow C \rightarrow A$ と移動することを A_{II}
 $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow D$ と移動することを D_{III}
 $A \rightarrow B \rightarrow D$ または $A \rightarrow C \rightarrow D$ と移動することを D_{II} と表すことにする。

このとき、点 P が頂点 A を出発してから、次に A または D に辿り着くまでの移動方法は、必ず $A_{\text{III}}, A_{\text{II}}, D_{\text{III}}, D_{\text{II}}$ のうちのいずれか 1 つである。(すなわち、いずれか 1 つだけが必ず起こる。) $A_{\text{III}}, A_{\text{II}}, D_{\text{III}}, D_{\text{II}}$ が起こる確率を、それぞれ $a_{\text{III}}, a_{\text{II}}, d_{\text{III}}, d_{\text{II}}$ と書くことにすると、

$$a_{\text{III}} = \frac{2}{3} \cdot \frac{2}{3} \cdot \frac{1}{3} = \frac{4}{27}, \quad a_{\text{II}} = \left(\frac{1}{3}\right)^2 = \frac{1}{9}, \quad d_{\text{III}} = p_3 = \frac{8}{27}, \quad d_{\text{II}} = p_2 = \frac{4}{9} \text{ である。}$$

(なお、 $a_{\text{III}} + a_{\text{II}} + d_{\text{III}} + d_{\text{II}} = \frac{4}{27} + \frac{1}{9} + \frac{8}{27} + \frac{4}{9} = 1$ である。)

一般に、点 P は、移動を開始してから、 A_{III} または A_{II} の移動を何回か繰り返した後、最後に D_{III} または D_{II} のいずれか一方の移動を 1 回だけ行って、移動を終了する。また、このとき

- $Y = (A_{\text{III}} \text{ または } A_{\text{II}} \text{ の移動を行った回数})$
- $X = (A_{\text{III}} \text{ または } D_{\text{III}} \text{ の移動を行った回数}) \times 3 + (A_{\text{II}} \text{ または } D_{\text{II}} \text{ の移動を行った回数}) \times 2$ である。(ここまでは、(2), (3) 共通の設定)

(2) における「 $X = 3n$ かつ $Y = n - 1$ 」となるのは、「 A_{III} の移動を $n - 1$ 回行った後、 D_{III} の移動を 1 回行って、移動を終了する」場合に限られる。したがって、求める確率は

$$(a_{\text{III}})^{n-1} \cdot d_{\text{III}} = \left(\frac{4}{27}\right)^{n-1} \cdot \frac{8}{27} = \frac{2^{2n+1}}{3^{3n}}$$

(3) 移動を終了するまでに,

- A_{III} または D_{III} の移動を行った回数を b ,
- A_{II} または D_{II} の移動を行った回数を c

とする。このとき、常に $X = 3b + 2c$, $Y = b + c - 1$ が成立するので、
「 $X = 3n$ かつ $Y = n$ 」となるための条件は、

$$\begin{cases} 3b + 2c = 3n \\ b + c - 1 = n \end{cases} \Leftrightarrow \begin{cases} b = n - 2 \\ c = 3 \end{cases}$$

である。よって、

- D_{II} の移動で、移動を終了するときには、
「 A_{III} の移動 $n - 2$ 回, A_{II} の移動 2 回」を行った後, D_{II} の移動で、移動を終了する。
したがって、このように移動する確率は ${}_n C_2 (a_{\text{III}})^{n-2} (a_{\text{II}})^2 \cdot d_{\text{II}}$ である。
- D_{III} の移動で、移動を終了するときには、
「 A_{III} の移動 $n - 3$ 回, A_{II} の移動 3 回」を行った後, D_{III} の移動で、移動を終了する。
したがって、このように移動する確率は ${}_n C_3 (a_{\text{III}})^{n-3} (a_{\text{II}})^3 \cdot d_{\text{III}}$ である。

以上より、求める確率は

$$\begin{aligned} & {}_n C_2 (a_{\text{III}})^{n-2} (a_{\text{II}})^2 \cdot d_{\text{II}} + {}_n C_3 (a_{\text{III}})^{n-3} (a_{\text{II}})^3 \cdot d_{\text{III}} \\ &= {}_n C_2 \left(\frac{4}{27}\right)^{n-2} \left(\frac{1}{9}\right)^2 \cdot \frac{4}{9} + {}_n C_3 \left(\frac{4}{27}\right)^{n-3} \left(\frac{1}{9}\right)^3 \cdot \frac{8}{27} \\ &= {}_n C_2 \cdot \frac{4^{n-1}}{3^{3n}} + {}_n C_3 \cdot \frac{4^{n-2} \cdot 2}{3^{3n}} \\ &= \frac{4^{n-2}}{3^{3n}} \left\{ \frac{n(n-1)}{1 \cdot 2} \cdot 4 + \frac{n(n-1)(n-2)}{1 \cdot 2 \cdot 3} \cdot 2 \right\} \\ &= \frac{4^{n-2}}{3^{3n}} \cdot n(n-1) \left\{ 2 + \frac{1}{3}(n-2) \right\} \\ &= \frac{n(n-1)(n+4)2^{2n-4}}{3^{3n+1}} \end{aligned}$$

5

- (1) $A(0, -1, -6), B(1, -2, -4)$ より $\overrightarrow{AB} = (1, -1, 2)$,
 $C(1, 1, 2), D(2, 3, 1)$ より $\overrightarrow{CD} = (1, 2, -1)$ である。
 よって, \overrightarrow{AB} と \overrightarrow{CD} のなす角 θ について,

$$\cos \theta = \frac{\overrightarrow{AB} \cdot \overrightarrow{CD}}{|\overrightarrow{AB}| |\overrightarrow{CD}|} = \frac{1 \cdot 1 + (-1) \cdot 2 + 2 \cdot (-1)}{\sqrt{1^2 + (-1)^2 + 2^2} \sqrt{1^2 + 2^2 + (-1)^2}} = \frac{-3}{6} = -\frac{1}{2}$$

したがって, $0^\circ \leq \theta \leq 180^\circ$ より $\theta = 120^\circ$ (もしくは, $0 \leq \theta \leq \pi$ より $\theta = \frac{2}{3}\pi$)

次に, 求めるベクトルを $\vec{n} = (a, b, c)$ とすると,

$$\begin{cases} \vec{n} \cdot \overrightarrow{AB} = 0 \\ \vec{n} \cdot \overrightarrow{CD} = 0 \\ |\vec{n}| = \sqrt{3} \end{cases} \Leftrightarrow \begin{cases} a - b + 2c = 0 \dots\dots ① \\ a + 2b - c = 0 \dots\dots ② \\ a^2 + b^2 + c^2 = 3 \dots\dots ③ \end{cases}$$

② - ① より $3b - 3c = 0 \Leftrightarrow b = c$ これを①へ代入して $a = -c$

これらを③へ代入して, $(-c)^2 + c^2 + c^2 = 3 \Leftrightarrow c = \pm 1$

したがって, 求めるベクトル \vec{n} は, $\vec{n} = (1, -1, -1), (-1, 1, 1)$

- (2) 条件 (a), (b) より, 実数 s, t を用いて $\overrightarrow{AL} = s\overrightarrow{AB}$, $\overrightarrow{CM} = t\overrightarrow{CD}$ と表せる。これより, 原点
 を O として,

$$\overrightarrow{OL} = \overrightarrow{OA} + \overrightarrow{AL} = \overrightarrow{OA} + s\overrightarrow{AB} = (0, -1, -6) + s(1, -1, 2) = (s, -s-1, 2s-6)$$

$$\overrightarrow{OM} = \overrightarrow{OC} + \overrightarrow{CM} = \overrightarrow{OC} + t\overrightarrow{CD} = (1, 1, 2) + t(1, 2, -1) = (t+1, 2t+1, -t+2)$$

したがって $L(s, -s-1, 2s-6), M(t+1, 2t+1, -t+2)$ であり,

$$\begin{aligned} \overrightarrow{LM} &= \overrightarrow{OM} - \overrightarrow{OL} = (t+1, 2t+1, -t+2) - (s, -s-1, 2s-6) \\ &= (-s+t+1, s+2t+2, -2s-t+8) \end{aligned}$$

一方, 条件 (c) と (1) より $\overrightarrow{LM} \parallel (1, -1, -1)$ なので, $\overrightarrow{LM} = k(1, -1, -1)$ (k は実数)
 と表せる。よって,

$$\begin{cases} -s+t+1 = k \dots\dots ④ & ④+⑤ \text{ より } 3t+3=0 \Leftrightarrow t=-1 \\ s+2t+2 = -k \dots\dots ⑤ & ④+⑥ \text{ より } -3s+9=0 \Leftrightarrow s=3 \\ -2s-t+8 = -k \dots\dots ⑥ & \text{(これらを④に代入して, } k=-3) \end{cases}$$

したがって, $L(3, -4, 0), M(0, -1, 3)$

- (3) $\overrightarrow{PQ} = \overrightarrow{AQ} - \overrightarrow{AP} = (k+1)\overrightarrow{AB} - k\overrightarrow{AB} = \overrightarrow{AB}$

なので, $|\overrightarrow{PQ}| = |\overrightarrow{AB}| = \sqrt{1^2 + (-1)^2 + 2^2} = \sqrt{6}$

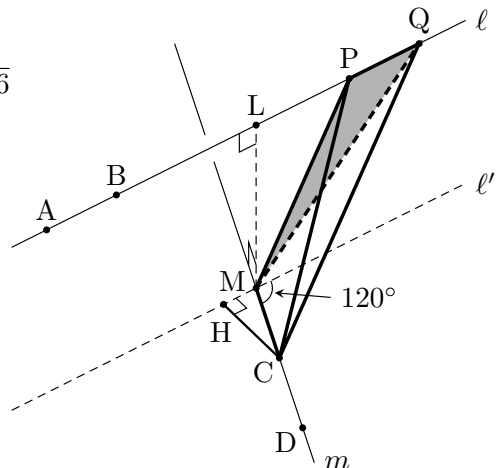
また, $\overrightarrow{LM} \perp \overrightarrow{AB}$ より $\overrightarrow{LM} \perp \overrightarrow{PQ}$

よって, $\triangle PQM$ において,

PQ を底辺とみたときの高さは LM である。

$$LM = |\overrightarrow{LM}| = \sqrt{(-3)^2 + 3^2 + 3^2} = 3\sqrt{3}$$

なので, $\triangle PQM$ の面積は



$$\frac{1}{2} \cdot PQ \cdot LM = \frac{1}{2} \cdot \sqrt{6} \cdot 3\sqrt{3} = \frac{9}{2}\sqrt{2} \dots\dots ⑨$$

M を通り l に平行な直線を l' とする。

また、点 C から直線 l' に下ろした垂線を CH とする。このとき、

- $LM \perp l$ と $l \parallel l'$ より $LM \perp l'$ 、これと $LM \perp m$ より $LM \perp (l' \text{ と } m \text{ を含む平面})$
よって、特に $LM \perp CH \dots\dots ⑩$
- $l' \perp CH \dots\dots ⑪$

⑩, ⑪より $CH \perp (\text{面 PQM})$ なので、

面 PQM を底面とみたとき、四面体 PQMC の高さは CH である。

(1) より \vec{AB} と \vec{CD} のなす角は 120° で、 $l' \parallel l \parallel \vec{AB}$ なので、 l' と m のなす角も 120° である。また、 $MC = \sqrt{1^2 + 2^2 + (-1)^2} = \sqrt{6}$ なので、

$$CH = MC \sin 120^\circ = \sqrt{6} \cdot \frac{\sqrt{3}}{2} = \frac{3}{2}\sqrt{2} \dots\dots ⑫$$

$$\text{⑨, ⑫より、四面体 PQMC の体積 } V \text{ は、} V = \frac{1}{3} \cdot \Delta PQM \cdot CH = \frac{1}{3} \cdot \frac{9}{2}\sqrt{2} \cdot \frac{3}{2}\sqrt{2} = \frac{9}{2}$$